



深夜、 山麓駅前で

10月11日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月11日のおはなし「深夜、山麓駅前で」

うろうろ駅前をさまよう。どこだか知らないけど、ホント盛り上がらない駅。日が暮れるともう商店がばたばた店をたたみ、一気に寝静まってしまうんだ。東京暮らしが長すぎて、こういうの、ちょっと信じらんない感じ。まだ7時だよ!? 眠ってんじゃねーよ! よい子でもまだ起きてるよ? って思うけど、よく見たらここもまだ東京らしい。マジ? 嘘でしょ?

さあどうしよう。どこかに泊まりたくてもお金はなし。お金があってもこのしけた駅前に泊まる場所があるとも思えない。幸い駅もじきに静まり返りそうだから、そしたらホームに潜り込もうか。さっきの電車が行ってしまってから十分と経ってないのに、駅前の気配は深夜の住宅街みたい。というか山も黒々迫って、どこかから勢いよく流れる川の流れも聞こえて、地方のひなびた温泉にでも来たみたいない感じだ。

なんだかなあ。なんでこんなところに来たんだろう。よりによって山だなんて。わたしは駅前のバス停のベンチに腰掛ける。時刻表を何気なく見てまたぶっ飛ぶ。もう終バスが出たらしい。まだ7時だよ!? よい子にもほどがあるよ! あーあ。めげるなあ。家出したらもっと盛り上がると思ってたのになあ。ケータイもつながんないし、暗くて本も読めないし。iPodバッテリー一落ちるし。何か面白いことないかなあ。

まあ、そういう運命なんだよ。だから出てきたんじゃないか。諦めなつて。何もうまくいかないのはわかってるんだ。努力したって空回り。目立たないようにしたつもりが目をつけられる。そのくせ困ったときには誰も気かけちゃくれない。友達も離れていく。持ち物は壊れていく。だからこの何もなしの駅前はちょうどわたしにぴったりお似合いの場所かもしれない。

* * *

眠ってしまったらしい。気がつくあたりがざわついている。

駅前はますます暗く、ついてる電気といえば改札の奥の蛍光灯くらい。駅前には一切の明かりがなくなってる。見上げると星がきれい。きれいというより星の数が多すぎてちょっと気持ち悪いくらい。星ってこんなにたくさんあったんだ。大きいのも小さいのやいっぱい見えすぎて、なんか奥行きがあるみたいでヘン。そりゃ、宇宙には奥行きがあって当たり前なんだろうけど、でもヘン。近い星とか遠い星とかフツー考えないよね? なのに近い星とか遠い星が感じられて。うわあなんか肌がざわざわする。

と思った瞬間、不意にあたりが明るくなる。ぱちぱち何かはげせる音。明るくなると同時に温度も上がる。あっと思ったらそこにはたくさんの人が集まってきていて、何本ものたいまつがうごうご燃えてる。うー————と低いなり声がしたかと思うと、突然その声がうわああああと盛り上がり、音も高くなって、そこにどおおおおおんと太鼓の音が響く。わたしの腰はベンチの上で飛び跳ねる。それくらいいきなりの大きな音なんだ。

明かりの正体は無数のたいまつだ。おびただしい数のたいまつが駅前の小さな噴水広場のまわりをぐるぐる回り始める。たいまつ行列の内側ではそれと逆行して踊りの輪が回り始める。何を言っているのかよく聞き取れない歌声が高く低くあたりを満たす。轟く大太鼓の音がすぐその山を揺るがさんばかりに鳴り響く。うわあ何なの? 何が始まったの? 今日は何かの祭りの日だったの? まさかよそ者がいたら取って食ったりするんじゃないよね?

歌声に耳を澄ます。聞き取れない。そう。これはたぶん日本語じゃない。ひょっとするとどこの国の言葉でもない。歌い踊っているのはとりたてて風変わりというわけではない。ついさっきまで台所に立ってたような女の人がある。スーツを着た男の人がある。学生服の少年もいる。わたしと同じ年くらいでわたしと同じような服を着た子もいる。なのにそこは日本じゃないし、彼らは日本人でもない。ひょっとするとどこの国の人でもない。

わたしと同年くらいでわたしと同じような服を着た子が、つ、と寄ってきて手を伸ばす。わたしは立ち上がり踊りの輪に入る。踊りの輪に入ると、歌声は意外に華やかで、リズムも楽しげだ。たいまつのみかりしかないのに、そこには赤緑オレンジ紫黄色黄緑とありとあらゆる色があって、それがとってもきれいにはね回ってて気持ちが浮き立ってくる。わたしはその子と手をつなぎ、くるくる回り、跳びはね、聞いたこともないはずの歌を大声で歌う。高い声も低い声もびんびん響かせて歌う。いちばん上手に歌う。

「祝祭だ」とすれ違った男の人がつぶやくのが聞こえる。そうだそうだそれぞれ。わたしはものすごい勢いで回転しながらうんうんとうなずく。何のお祝いだろう？ 何のお祭りなんだろう？ なんでもいい。これは祝祭だ。とびっきりの祝祭だ。

そうつぶやきながらわたしは目を覚ます。朝日が駅前をまぶしく照らし出して、噴水の水が信じられないくらいに光り輝いている。山の緑が濃く淡く青空を背に目にしみる。たくさんの鳥のさえずりが、どこか他の国の不思議な音楽のように、朝の大気を震わせる。わたしは少しくたくたで、でも今日はあの山に登ってみようかな、と思う。

(「祝祭」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

深夜、山麓駅前

<http://p.booklog.jp/book/35126>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35126>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35126>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.